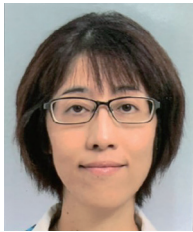


異文化交流のすすめ



松田景子

(株)東レリサーチセンター構造化学研究部
[520-8567] 大津市園山3-3-7
部長, 博士(工学).
専門は分光分析.
keiko_matsuda@trc.toray.co.jp
www.toray-research.co.jp/

社会人になってから、早20年以上たちます。その間、一貫して分析業務を行ってきましたが、その中で異文化をもつ研究者の皆様とお仕事をさせていただき、刺激を受けてきました。異文化との交流は大変なことも多いですが、とても楽しい。これまでの自分と違う視点を得ることで、新しい面白さに出会えたり、解釈に深みが出たり、新しいアイデアがわいて来たりしてわくわくします。今回、このような機会をいただきましたので、少し自分を振り返ってみました。

大学では再生可能エネルギーに関する勉強がしたくて電気化学を学びました。しかし、当時は就職氷河期。会社に入ると、これまでの研究とは関係のない、半導体素子関連の分光分析を担当しました。使われる技術用語がわからず、悪戦苦闘の毎日でしたが、最先端の半導体素子の開発品、不具合品がどのような状態になっているのか、詳細に評価していく作業はとても楽しかった。どうやら、自分が研究を楽しいと感じるのは、「まだだれも知らない秘密がわかったかも」と感じる原始的な喜びであったようです。それまでは分析対象や目的にこだわっていましたが、異文化に放り込まれて初めて自身のモチベーションは何か気付くことができました。

また、不具合の要因解析を行う際には、複数の視点で対象物を観る必要が出てきます。各分析手法のスペシャリストが個々のデータをもち寄り議論するのですが、その際、FT-IR一筋、SEM一筋数十年という方々が、非常に微妙なデータの差異から不具合要因の可能性を語られるのです。正常部と異常部の差は極わずか。本当にこんな微妙な差を差として言及してよいのか、疑問を口にしたこともありました。しかし、日々、その手法でどこまでが有意差でどこから誤差か、何が言えて何が言えないのか、ぎりぎりまで考えてこられた方々が相互に意見交換されることによって、真値が見えてきます。通常であれば埋もれて見えなかったはずの要因が「観えた」と感じる瞬間に何度も立ち会うことができ、光栄でした。

最近では医工連携の高まりにより、ライフサイエンス分野にもかかわらせていただくようになりました。

半導体素子のように、原子1個分から制御されうる系では、一つの分析結果から設計にフィードバックすることができますが、生物のように個体差、多様性がある系では、ばらつきを含めた評価や、再現性の確認が非常に重要になってきます。それぞれ全く異なる文化をもっていますので、発達してきた分析手法のラインナップも異なります。ただ、対象物の違いを十分理解したうえで、異文化の評価法を適用してみると、意外と画期的な評価法として使用できることがありました。たとえば、バイオ分野で多用される染色法を工業材料分野での質量イメージングと組み合わせると、これまででは考えられないほど高精細なバイオイメージング手法として活用することができたのです。お互いの文化を理解し、新しい視点で見ていくと、その境界線上で新しいアイデアが生まれるのだと思います。それは、男女間での文化、世代間の文化でも同じではないでしょうか。

私事になりますが、家庭では長男が生まれた後、旦那の両親と同居いたしました。毎日の送り迎えから、夕食の用意、突然の病気やけがの呼び出し対応等々、数え上げたらきりが無いほどお世話になりました。おじいちゃん、おばあちゃん本当にありがとう!!

一方で、暮らしてきた環境や世代によって、「普通」と考える内容も異なってきます。「母親だから〇〇しなくて」「女だから〇〇だ」等と言われることもあり、「そんなことないけどな……」と心ひそかに反論することもありました。自分側の「普通」は理解してもらえないだろうとの勝手な思い込みや摩擦の面倒くささから、自分の文化を伝える努力もせずいたのですが、ある女性の先輩から「実の親でも伝えなくては理解し合えない。」と言われ、はたと気が付きました。最近では「こちらではこう思っているよ。この文化における「普通」は他文化では「普通ではない」かもよ〜。」「こういう考え方もあるよね〜。」と小出しにしてお伝えしています。やってみると意外に、「そうやなあ。そういう風に考えると気が楽やな」と異文化交流が進んでいます。新しい発見のためにはお互いのコミュニケーションが欠かせません。仕事でも私事でも同じだなと思う今日この頃です。